

## 学部ゼミの授業研究

学校臨床心理専攻 中村雅彦

### 1. 授業の目的と到達目標

社会心理学のテーマを卒業研究に選び、実験あるいは調査等を通じて心理学的なものの方を学ぶ。到達目標は、研究テーマの立案力が養われる、実験や調査の設計が自分でできるようになる、心理学的データの集計と解析が自分でできるようになる、研究結果を集約し、科学論文が書けるようになる、研究成果をプレゼンテーションする力が身につく、の5点である。

### 2. 授業運営の方法

各自の進度、習熟度に応じて個別指導がなされる。また、演習において討論する力を身につける。自分の興味・関心が尊重され、それを研究成果に生かすための支援が教員から提供される。また、受講のルールとして、授業中に解決できなかった課題は宿題として課される、

Yahoo!Japan 上に構築された中村ゼミグループに参加して、討論を行ったり、研究の進捗状況を報告する、パソコンなど情報機器の操作に習熟するための努力を怠らない、自宅でもインターネットに接続できる通信環境が望ましい、の4点を設定した。

### 3. 学生による授業評価

学生による授業評価は、Yahoo!Japan のグループで「社会心理学研究の授業を振り返って」という題目について、小レポートを書いてもらうことで行われた。対象者は社会心理学研究を受講している4名の学部学生とTAとして授業補助にあたってくれた1名の大学院学生である。

「組織」的授業運営の効果：大学院生と学部生の縦の人間関係の構築は、手本になる人をつくってくれ、初めての卒論をスムーズに運ぶことができた。TAから提供された対人サポートは、教員とはまた違った形で身近な指導を受けられ、自主ゼミを通じて一緒になって学習を深めることができた。

動機づけの高まり：卒論は、もちろん自

分の問題意識によってやるもので、決してやらされるものではないが、一人ではその意欲を維持するのは大変なことである。他のゼミ生などの進行状況や、院生からの刺激などが、卒業研究への強い動機づけになった。

インターネットを利用したバーチャルゼミの効果：授業の前日までに、ゼミで発表すること、質問することなどをメールでアップし、実際のゼミでは教員からフィードバックをしたので、ゼミの時間も短縮できた。ゼミの特色であるネット・コミュニケーションは、いつでも利用できる環境は整っている反面、活字によるコミュニケーションの難しさを感じることもあった。メールによるコミュニケーションのスキルを学ぶことも大切だが、対面的なコミュニケーションも大切である。

上記のような意見が寄せられた。本授業におけるゼミの運営形態は、その組織的な人間関係作りをめざすものであったが、基本的には学生達の学習意欲を高め、一定の成果をあげたといえよう。

### 4. 問題点と課題

上記の小レポートを受けて、さらに、学生たちの意見を出し合い、この授業に関する問題点と課題について、メールにより指摘を得た。回答のあった3名の学生の結果をを以下に示す。

#### 1) 学生Aの指摘

各々が問題意識を持つ、日常の出来事を、心理学的研究法を用いて分析、考察することができた。目的は達成できたと言える。

到達目標についても概ね達成できたと考えられる。指導教員は、的確な指導を通して、問題意識や研究計画上の不明瞭な点を、学生に主体的に考察させていた。これにより、卒業論文はあくまで「自分の研究」という意識を常に持つことができた。

データの集計と解析に関しては、調査法や参考書上では理解の限界があることも痛感

した。基本的な分析手順に沿って各自分析を行い、必要ならば指導をもらい進めていった。欲を言えば、その他の分析方法についても触れる機会があればとも思うが、時間的制限を考えると、仕方がないといえる。

学んだことは理解できても、それ以上の知識や理解が無いことが、不安である。科学論文を書くことに関しては、過去のゼミ生の論文がすぐに読める範囲に置かれ、ネット上にも掲載されていることから、基本的な表現方法や章立て、全体バランスなどについて参考にしながら書き進めることができた。

プレゼンテーションに関しては、自主的な練習や、学部ゼミ生や TA との合同練習を通して各自がよりよいものを作成しようと心がけ、プレゼンテーションの力を養っていった。

全体の問題点としては、自主ゼミの開始時期があまりに遅かったことである。院生も含めると 12 人という大所帯のゼミでは、指導教員から指導をもらえる時間が絶対的に限られる。

そのため、自発的な集まりなどを通して、各自研究を進め、ゼミの際に本当に聞きたい情報を整理しておく必要がある。後期の自主ゼミには三回生も参加したが、一年通して培われた視点を通して、助言できる部分もある。こうした伝授体制が、昨年度も存在していれば、よりスムーズに、多角的な視点をもって研究を行えた可能性もあるだろう。

また、ゼミ生同士、指導教員との対面上のやりとりが困難なことも多かったため、ネット上での添削システムは、効率的であったように思う。是非今後も活用したいシステムであると言える。

## 2) 学生 B の指摘

まず目標の達成度についてですが、自分の興味のあるテーマを突き詰めていくことが最初はすごく難しく、戸惑ったが、教員や院生、上回生の助言やアドバイスにより、何とか自分で研究を立案出来たと思う。

具体的には論文の取り寄せ方など、基本的なことに始まり、論文を読む時の見方や、研究の

進め方など色々なアドバイスをもらうことができた。

調査が始まってからも卒業生に分析の手順や統計ソフトの使い方などを教えてもらい、自分でデータを処理することが出来るようになった。

考察や実際に論文を書く段階では、院生との自主ゼミが始まり自分のいたらなさを感じながらも、すごく助けになった。

課題としては、パソゼミでのコミュニケーション方法を熟知出来ていなかったことが挙げられる。

## 3) TA の感想

本授業を進めるにあたって、教員と学部学生の間での仲介的、研究補助的な役割として TA を任用した。TA から本授業に関する意見、感想を報告してもらった。以下にその結果を示す。

『実際のゼミ以外にも、インターネットやメールでの個人的なやり取りもあり、効率よくゼミを進めることができたと思います。』

今回、私は TA として入らせていただきました。私自身学ばせていただくことばかりで、学部生と一緒に勉強することができ、とてもよかったです。また、院生と学部生との掛橋になることもできたのかなと思います。ゼミや自主ゼミを通して、お互いに刺激し合い、一緒に勉強することを通して、より仲を深めることもできたのではないかと思います。先生や学部生にはどのくらい力になれたかわかりませんが、私自身が得るものがとても多かったように思います。今回、このような場を与えて下さって本当にありがとうございました。』

## 5. 結語

ゼミ運営については教員、大学院生、学部 4 回生、学部 3 回生による縦と横の集団運営を心がけ、互いに刺激し合うことで卒業研究に対する主体的な姿勢、自発的な学習意欲を育てることがある程度できたと言えよう。筆者の 12 年間にわたる教育学部での教育活動の経験の中で、もっとも有意義と感じたことは、学生との厚い信頼関係に根ざしたゼミ運営ができたことである。